

## 哀愁のプラットホーム

桜田靖

坂口勉は、東京駅八重洲口の裏通りにある今にも崩れそうな古いビルの中の小さな建設会社の社員だった。名刺の肩書きは秘書室長と由緒正しい佇まいだが、要するに社長の小間使いで部下も持たないポストだった。会社自体が零細企業で、大手・中堅の建設業者の孫請け、曾請けひこのビルの外装専門で生きていて、社長も無欲な経営者だった。経営者に野心がないから、何十年も正社員十名程度に職人さんを八十人位登録した規模であり、時期により激変する景気にも左右されず会社が生き延びて来たのかも知れない。社長は彼より二才年長、九州の片田舎の同じ集落で育った幼馴染の間柄という縁があった。「勉強ちゃん、定年は気にするなよ。俺達はある他人じゃないから好きなようにしたら良いさ。今日はその辺で一杯やって帰ろうか？」と社長から二人きりしかいない昼下がりの事

務所で誘われた。別に小粋な料亭や小奇麗な銀座のレストランで飲むはずはない、と分かっていた。この八重洲界限には縄暖簾のれんや赤提灯の呑み屋がわんさと軒を連ねている。そんな店での酒席に決まっていた。

この三月に還暦を過ぎて定年になる坂口勉は進退を決めかねていた。同郷の誼よしみで社長とは青年時代から気楽に接して来たし、ずっと世間並みの給与はもらって来たからである。しかし、サラリーマンとしての進退となると、年金受給年令までの生活の問題もあり家族の意向も聞くべきだし、自分の健康状態も精密に検査し知っておくべき年齢である。社長とはいえ、零細企業では一営業マン同然で、日々社外を飛び回っていて自分より世間を良く知っているから、今夜一杯ご馳走になりながら相談し、今後のことを決めようと思った。

夕刻、すっかり夜の帳とばりが降りた街は、昼間の顔と表情を一変する。会社のそばの小路へ社長と坂口勉は向かった。薄闇にギラギラ、

コテコテの電飾が無秩序に輝く雑駁たる呑兵衛横丁だった。一定時に会社を退けても、この時期は真夜中と変わらないな。」と社長の声に心なしか張りなかつた。馴染みの縄暖簾れんを右手でかき分けて店の戸を開けた社長の背中に、彼は背後霊みたくにくつついて店内に入った。カウンターだけの小さな居酒屋だが、実は奥にカーテン一枚で仕切られた畳の小部屋があつた。古ぼけた長四角の卓をはさんで薄い座布団が二枚敷いてあるだけの個室だった。「はい、いらっしやい、毎度ありい！社長、VIPルームが空いてますよ。」とマスターの通りの良い威勢のある声が、酔っ払い達の騒然たる声をナイフで切り裂くように狭い店内に響き渡つた。カウンターのイスには背広ネクタイ族の客が電線の小鳥のように止まり、みんな隣の連れとがなり合い、それぞれビールや日本酒や焼酎を喉に流し込むように飲んでいた。こんな店にメニューなんて気の利いた

ものはない。カウンターの向こうの壁に張り出された煤けた紙に手書きの焼き鳥だの煮込みだの焼き魚だの冷奴だの夥おびただしい品名から好物を選び、店員に怒鳴れば「はい、お待ち！」といずれ目の前に出てくる。

くだんの奥の小部屋に社長と坂口勉は向き合って座った。とりあえずビールで乾杯した。

「あんたも六〇になるのか。」と社長が溜息をついた。

「還暦のめでたさと言って下さい。」と坂口勉は無理矢理笑ったが、自分の発した声が心の壁に虚ろにこだました気がした。

「今夜は寒いな。たまにはフグ刺し、フグちりで豪勢にやろうや。長嶋の真似して、フグの身を箸はしで豪快に掬すくって食おうぜ。」と社長は長年の寵臣を労わるように言った。フグの薄造りといって、粘着性の強いフグの身を、ミリ単位の透けるほどにスライスするのが板前の包丁捌きの見せ所、それを野球のミスター長嶋は一枚、一枚口に運ぶのが面倒だったの

か、十枚位重ねて食ったという伝説がある。  
「そうですか。一度やってみたかったですよ。とっても嬉しいです。」やっとな坂口勉は心の憂さを忘れたように顔を綻ばせて笑った。  
「関東以北ではフグを怖がって食わない人が多いな。関西に行ったらフグは当たると死ぬから『鉄砲』といって、それがフグちりを鉄ちり、フグ刺しを鉄さと呼ぶんだ。今はフグ中毒の原因が完璧に分かり、猛毒のある内臓を捨てて血をきれいに洗い落とし、きちんと調理すれば百パーセント安全、安心なんだがね。」と社長が蘊蓄を垂れた。

昔、食通の人々がフグ中毒で死に至った名残で鉄砲という言葉が関西の食文化の奥底に仕舞いこまれているのである。

「子供の頃は、親父達が釣ってきたフグを自宅の台所で捌いて食っていましたね。だから、フグを怖いという意識は毛頭ありませんよ。」  
と坂口勉は子供の頃の光景を思い出した。  
「俺もあんたも九州男児たい。フグのどこが

えすか（怖い）の意」とね。」と社長が郷の言葉丸出しで喋り、二人して大笑いした。「はい、お待ち！」と若い学生アルバイトみたいな店員が彩色鮮やかな百花繚乱の大皿の模様が透けて見えるフグ刺しを卓上に持ち込んだ。

「俺の会社に勤めて何年になるかね。」

「約三十年ですよ。いつの間にか東京駅のホームに三十年間も乗り降りしていたんですよ。」と坂口勉は上品に薄いフグの刺身を一枚口に入れた。

「鶴見の工場勤めが嫌で辞めて社長に拾ってもらったんですよ。毎日、毎日、薄汚い煤煙の下で単調な作業をしていたら、空のきれいな九州への里心が募りましてね、親父に仕事を辞めたいと電話したら、馬鹿たれと怒鳴られたのがついこの前みたいですよ。」坂口勉は昔を思い出すとしんみりとした口振りになった。「住まいは同じだったよな。」

「工場の寮が戸塚でしたから、この会社にお

世話になってからも住み慣れた戸塚に家を建てました。まだ家のローンがだいぶ残っているんです。」

「子供さんも成人しているのだし、ローンは気にすることないさ。」と社長は慰めた。

「ふと考えたんですが、戸塚駅のプラットホームを四十年以上も利用しているのですね。」

「うちの会社は、支店も営業所もないから転勤もないし、同じレールの上を行ったり来たり  
の人生になるな。」と社長は自嘲的に笑んだ。

「子供の頃、田舎の駅で色んな人がいても名前はともかく、何処の誰かくらいは顔で分かりましたよ。今、戸塚駅を乗り降りして来たこの四十年間を振り返っても、同じホームから乗り降りした人の顔が思い浮かばないですね。今朝、ホームで自分の回りにいた連中の人相も覚えてないです。顔のない人々ですよ、」坂口勉は今更気が付いたように言った。

「そう言うあんたもその顔のない一人じゃないか。大都会の匿名性とか無名性とかいうこ

とじゃないか。人間は必要なことや、興味あることだけを記憶するように出来ているのだよ。迷惑さえかけなきゃ、自分の周辺に誰がいたって無関係で覚える必要がないだろう。」と社長が社会学的に講釈した。

「しかし、例外はありますね。何人か忘れられない人物がいますよ。」

「世の中、何だって例外があるさ。面白いことなら話してみな。聞いてやるよ。」ビールから焼酎のお湯割りに変えた社長の頬は紅潮していた。

「確かに何人か忘れない顔がいますね。何年か前、社長の代理で鉄鋼会館の会議に出た時、途中で缶コーヒーが一人一人に配られたんですよ。その時に缶コーヒーを配った若い女の職員の顔をチラッと見たんです。そうしたら、翌朝戸塚駅のホームで、その娘むすめがすぐそばに並んで電車を待っていたんです。」

「挨拶でもしたのかい。もっとも会議場に百人はいたろうから、いちいちその娘が相手の

顔を覚えていいるはずもないがね。」

「そうなんですよ。だから、私は知らんふりしてましたけど、その後も気をつけていたら何回か見かけましたよ。気になると顔も覚えてますよ。今では全く見かけないので結婚でもしたんじゃないかと思います。」

「そんなのなら、他にもあるだろう。」と社長は興に乗って来た。

「そうですね。これは私が若い頃でした。戸塚駅がまだ小っちゃな駅で、向かいの下り線ホームに盲導犬を連れた中年の上品なマダムをよく見かけました。行儀よく座るワンちゃんのを待っていましたね。いつの間にか見なくなりました。が、家内に聞いたら平塚の福祉施設の職員で、弱視でいつも盲導犬に引かれて買物をしているので、戸塚界隈の商店街では知らない人はいないと言っていました。」と坂口勉は若かった昔を思い出した。

「返って反対側のホームの人物が面と向き合

うので顔を覚えるんだね。」と社長が湯気を立てるフグちりの鍋の具を箸で突いた。

「同じ頃ですよ。やはり向かいのホームにテレビのアイドルと遜色のない女子高生がよく下り電車を待っていましたよ。いやあ、彫りの深いエキゾチックなまさに美少女でしたね。」人の記憶は芋づる式に出て来るものである。

「女の人ばかりだね。」と社長が何杯目かの焼酎のお湯割りをグビッと音を立てるように口に流し込んで彼を冷やかした。

「私も男ですからね。どうしても女の方に目が惹かれるんですよ。そのうち、その女の子が卒業して女子大生の格好で私と一緒にの上りホームに見かけるようになり、その後だいぶ年数が経ってから、一度だけその人がヨチヨチ歩きの幼児の手を引いて戸塚の街でショッピングしているのを見かけました。もう、アイドルみたいな面影はなく、単なる若い主婦の所帯染みた雰囲気でしたね。」

「まさに歳月を感じる話だね。ところで、会社はどうするかね。嘱託で残るかい。」と社長が本題を持ち出した。

「家内と相談して決めますが、もう常勤で毎日通勤するのは辛いですね。」と酒の力を借りて本音を言った。

「大学時代の友人が渋谷で法律事務所をやっているが、週に三、四日で良いから電話番号や簡単な事務を手伝ってくれる者を捜しているよ。パソコンも使えるし、あなたに向いている仕事だよ。何しろ弁護士は人の秘密を扱う職業で、誰か信用できる人の紹介がないとなかなか人を雇わないからな。」と話を持ちかけられた。

「良い話ですね。一度その先生に会って話を伺ってみたいですよ。」と彼は社長の話を応諾し、すっかり良い気分で焼酎のロックに口をつけた。酔いが回り口も滑らかになった。

「社長！さっきの話の続きですよ、ちよっと聞いて下さい。忘れようと思っても忘れられ

ない肝心のオヤジがいました。ここ四、五年のことですがね、電車を待っているとハウ、ハウと奇声を上げながらホームを歩く男がいるんですよ。最初はびっくりしました。」

その男は、年の頃は坂口勉と同年輩で、電車を待つ列の後ろの方で、「畜生！何処からこんなにもウジャウジャ湧いて来やがるんだ。」といつも忌々しそうに呟いていた。バセドウ氏病のように目の玉が飛び出して異様に光っているので気持ち悪く、彼はその男の傍をなるべく避けるようにしていた。そのオヤジは、終点の東京駅で降りると丸の内側に出て行くので、八重洲口へ向かう坂口勉は、男の行く先を知らない。背広にネクタイに革カバンというスタイルだが、一流会社ばかりの丸の内に入った。サラリーマンにしては安っぽい服装だった。あんな変人がホワイトカラーと思えなかった。大体が、そんなにラッシュの混雑が嫌なら金を出してグリーン車に乗れば良いのである。すでに戸塚駅からは座れなくても

ギューギュー詰め、の混雑はないので、高給取りの偉い身分でもなさそうだ。「そいつが暴れたり、他の乗客とトラブルを起こしたことはないのかい。」と社長が尋ねた。「私が知っている限り、それはないですね。」「どこか知らないが職場に着いたら作業着に着替えるブルーカラーの人じゃないか。」と社長が言ったので、坂口勉もそのように思います、と返事した。

その年の春から、坂口勉は社長の紹介した渋谷の法律事務所を非常勤として手伝って生計とした。通勤ルートも戸塚駅から横浜駅に出た私鉄の東横線に乗り換え、終点の渋谷駅まで通う身となった。自分も含めてだが、顔のない人々との通勤生活はまだ続くのである。そんなある日の帰宅時、彼が東横線の渋谷駅のホームで通勤特急を待つ列に並んでいたら、聞き慣れたハウ、ハウという奇声が背後から聞こえた。思わず反射的に振り向いたら、くだんの異様に目の玉の飛び出したオ

ヤジがホームを先頭車両の方向へ行くところだった。あの男も定年で渋谷に第二の人生の仕事を見つけたのだと思った。安っぽい背広姿と提げた革カバンも変わらない。彼は遠ざかる男の姿を、顔のない列の中から首を伸ばして目で追った。あの男も又、定年になったとて、住まいの地域に溶け込めず、惰性で勤め人を続けているのかも知れないと思った。遠景となった男のいるプラットホームの付近が哀愁を漂わせているように見えた。

終